



🍃 コロナ禍の緩和ケア病棟より

緩和医療科科长 井上 彰

本年は、当院の緩和ケア病棟にとって2000年の開設から20周年を迎える記念すべき1年となりますが、年明けて間もない時期から新型コロナウイルスに振り回される事態となりました。毎回お気楽な寄稿をしている私ですが、さすがに今回は本件に触れざるを得ません。

この原稿を書いている8月下旬においても、東北大学病院に入院中の患者さんご家族との面会は原則禁止となっていますが、緩和ケア病棟では、具合の悪い患者さんの不安軽減や諸々の支援にご家族の協力が不可欠な場合も多いため、「(低リスクの条件を満たした)登録された2名に限り病室への出入りや付き添いが可能」という特別ルールで対応しています。従来は「24時間いつでも誰でも出入り自由」でしたので、患者さん・ご家族からの落胆の声は少なくないですが、万が一にも病棟内で感染が広まってしまっ

ては元も子もありませんので、ご理解いただけるよう説明を重ねています。ただ、「(終末期のわずかな期間であれ)患者さんご家族が穏やかに過ごせる空間を提供する」ことが、様々な苦痛への専門的対処以上に重要な緩和ケア病棟の存在意義ですので、それが叶わない状況では「だったら自宅で過ごしたい」と考える方が増えるのも無理はありません。実際、在宅診療の老舗である岡部医院では、コロナ禍において紹介患者さんが平時から倍増していると聞きます(在宅診療に携わる皆様には本当に感謝申し上げます)。日頃「在宅療養は入院よりメリットが大きい」と公言している私としては、それはそれで喜ばしく感じる一方で、そのような中で緩和ケア病棟が果たすべき役割は、何らかの理由で在宅療養が難しくなった患者さんを引き受ける「最後の砦」として在り続けることと自覚しています。いかなる状況であっても、患者さんが「自分らしく生きる」ことを支援する我々の基本理念は変わりません。

近い将来、コロナ騒動が沈静化して、緩和ケア病棟のもう1つのウリであるボランティアさんによる様々な催し(午後のお茶会や季節毎のミニコンサートなど)が再開され、多くの方々と笑顔で触れ合える日が来ることを切に願っています。これから冬を迎えると感染が拡大するとの懸念も聞かれますが、春が来ない冬はないことを信じて、「最後の砦」を守っていきます。皆さまもどうかご自愛ください。



患者さんが大切に育てたヒメザクロ

オセアニア緩和ケア研修留学の報告

緩和医療学分野 講師 田上 恵太

皆様、いかがお過ごしでしょうか。緩和ケア病棟や一般病棟での症状緩和チームでお会いした方もお読み頂いているのではないかと考えております。

「福祉大国」「緩和ケア大国」と評価されるオセアニアでは、どのようなケアや支援を提供されているのかを学ぶため、2019年末にオーストラリアで2ヶ月間、ニュージーランドとシンガポールで1ヶ月間、研修留学をして参りました。まだ新型コロナウイルス感染症の影響はなく、現地では異常な高温と山火事で大騒ぎでした。ただ私が滞在したビクトリア州（州都はメルボルン）バララットという町は盆地であり、夏真っ盛り（南半球なので12月）でも朝の気温は10度を下回っていました（日中は40度近くまで上昇）。また、妻や子供3名を連れての渡航となり、家族で貴重な経験を積むことができました。学んだこと、感じたことは数知れず、ですが、特に印象に残った点を報告いたします。

オセアニアの医療体系は日本に比べてかなり厳しく、特に入院期間は約2週間という制限があり、2-3ヶ月以内の退院を前提とした準備病棟以外では医療機関で月単位療養する方はほぼいません。家で過ごせない方は施設で過ごす、というのが昔から文化になっており、施設の体系はシンプル（医療が必要か否か）でかつ整備されています。在宅介護支援の仕組みは日本と類似し、在宅医療は看護師さん主導でケアを提供します。地域の緩和ケアチームの介入がなければ、医師の訪問はほとんどありません。医師の存在は小さくなく、訪問看護師さんやケースワーカー達と患者さんと家族は医療や療養の希望、選択を行っていきます。

そして、治療の見込みや効果がなかった時の選択肢、余命や体が衰えてきた時の準備を、主治医や緩和ケアの医師、地域の医療者と話し合うことが文化になっています。体調が悪いときや治療の効果が無い時でも、ご家族は「本人にきちんと話してほしい」と望みます。ただしこの点は人種によって異なり（オセアニアは移民が多いのです）、時に「本人ががっかりするから伝えないでほしい」と家族に頼まれ困惑するようです（現地の医療者曰く、日本人はその傾向があると感じるとのことでした）。「自分らしく人生を歩み続けるために」、病気や治療と共にどのように過ごしていきたいか、家族に迷惑をかけないためにも今からどのような準備をすべきかを話し合うなど、日本でもアドバンスケアプランニング（人生会議）の文化が根付くことが、今後のこの国のかたちを考えると改めて重要であると感じます。

もちろんオセアニアの制度や文化を日本に移築することは得策ではありません。ただ、この経験も糧に、自分を含めてみなぎ安心してこの土地で最期まで生きるためには何をすべきなのかを、これからも考え続けていきます。

緩和医療科 松田 泰史

本年4月より緩和医療科でお世話になっております松田泰史と申します。これまでは消化器外科医として癌の治療を中心に診療を行ってまいりました。

外科医として手術、癌の再発に対する化学療法等の治療を行い、終末期に関しても一通りの治療が出来るものと思い診療しておりました。

ただ振り返ると、手術を共に乗り越え、その後の治療にあたっていたという関係性からか、多くのことを我慢して頂いていたということを気付かされます。

ここ緩和ケア病棟では、患者さん・ご家族と初めてお会いする所から治療が始まります。一から関係性を築き、抱えている苦痛、悩みに対し向き合い治療を行うことが必要とされます。だからこそ患者さん・ご家族と真正面から向き合い治療にあたる場所となるのではないかと考えております。

こちらに来て半年が経ちますが、まだまだ学ぶことの多い場所です。

今年はコロナ禍の影響もあり、緩和ケア病棟も様々な制限を受けている状況ではありますが、大切な時間を穏やかに過ごせるよう共に歩んでいければと思います。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

緩和医療科 山並 寛明

専攻医として10月から緩和ケア病棟に勤めております。人生の大切な時間に携わらせていただくことは本当にありがたく、少しでも還せるようにと日々想いながら診療にあたっています。「その人にとって最もよい過ごし方」というのは自明のようにみえても実際は人との関わりや制度のなかにあって悩むことが多く、そんなときは先輩方や患者様に教わりながら一緒に考えさせていただいています。精進してまいりますので、よろしくお願いいたします。



ペンネーム 白州 征さん作

看護師 伊藤 泉

今春より緩和ケア病棟に配属となりました。以前の部署は2年間、看護管理室の情報・リサーチ部門に所属しておりました。病棟勤務となり、患者さんやご家族の方々と関わる日々に、責任とやりがいを感じています。

私自身、2年前に父親が心疾患で倒れ、病院へ駆けつけたことがあります。急なことであり、物事を冷静に考えられませんでした。その時、医療スタッフの声掛けに、とても励まされました。

緩和ケア病棟から外を見ると、南側は遠くに太平洋、北側は中山観音、そして七ツ森という風景を眺めることができます。

こちらの病棟で働き始めて日も浅く、未熟ではありますが、緩和ケア病棟の素晴らしい環境の中、患者さんやご家族の方々の想いを聴き、何ができるか一緒に考え、ケアを行いたいと思います。

看護師 海野 美幸

4月より外来より緩和ケア病棟へ異動となりました。病棟勤務は7年ぶりで、全てのことがほとんどはじめてで皆さんにたくさん教えて頂いております。緩和ケア病棟で患者さんと接していく中で、日々たくさんの事を学ばせて頂いております。1日1日を大切に、適切な援助を苦痛無く行っていく事が大切だと感じています。話し声（聴覚）は最期まで聞こえると教科書にも載っています。実際に自分自身もそうだと思います。状態や状況にあった声掛けをこれからも行っていきたくと思います。学んだ事を、患者さんにあつた方法で実践していけるようにしていきたいです。患者さん、御家族の思いに寄り添い、穏やかに過ごすお手伝いが出来るように努力していきます。



看護師 星 真由美

外科病棟から異動し4月から西17階病棟で勤務させていただいております。外科病棟では急性期の患者様のケアに関わりながら同時に終末期の方や、治療を続けながらも残念ながらお亡くなりになる方にも関わらせていただきました。患者様の生命力に感動することもたくさんありましたが、闘病生活を見守っていた患者様の死を目の当たりにすることも少なくなく、患者様に寄り添ったケアを行えていたのか考える機会もたくさんあり、緩和ケアを学びたいと強く思うようになりました。まだまだ勉強不足で至らない点もたくさんありますが、これまでの経験を活かしながら、正確な技術と誠実な対応を大切に、患者様やご家族と関わる中で緩和ケアを学ばせていただき、患者様とご家族が安心して入院生活を送れるようにお手伝いをさせていただきたいと思っております。



医療事務員 庄司 春美

今年の2月から緩和医療科の病棟クラークとして仕事させて頂いています。

患者様の所へは、事務手続き等でお伺いしています。

病棟は穏やかでスタッフの皆様も優しい方々ばかりなので、緩和病棟にこられて良かったと思っています。

緩和病棟にきてからは、先生方や看護師さんが色々と話し合い・力を合わせ最期まで患者様やご家族に寄り添っている姿に感動しております。

患者様は穏やかに最期を迎えられ、そしてご家族の方からはお礼の言葉を聞くことができる緩和病棟に関われたことを大切にしたいと思います。

そして、少しでも病棟のお役に立てるよう頑張りますのでこれからも宜しくお願い致します。

ボランティアコーディネーター 成田 徳子

私は当院で看護師として勤務していましたが、令和元年に再雇用でボランティア室に配属されました。同じ病院で働いてもボランティアコーディネーターとはどんなことをするのか、具体的な緩和病棟でのボランティア活動についてほとんどわかりませんでした。同年6月から緩和ケア病棟の担当となり、前例に倣いボランティアさんと季節ごとのラウンジや部屋の飾り付け・イベントの準備、家族や面会者へのティサービスなどを行ってきました。入院期間が短いことや患者さんの状況もあり、直接患者さんや家族と関わる機会が少ないのが現状ですが、ボランティアさんと病棟スタッフの皆さまと「患者さん・家族がほんのひと時でもホッとできるような環境作り」を心掛けています。今後ともよろしくお願い致します。



地域医療連携センター ソーシャルワーカー 町田 雄一郎

平成31年1月より、緩和ケア病棟を担当しています。退院調整看護師とソーシャルワーカーの2名で、退院に関わる支援を行っています。役割として、退院調整看護師は、在宅に帰る支援、ソーシャルワーカーは、転院又は施設入所の支援を行っています。私個人としては、緩和ケア病棟を担当させていただくのが約10年ぶりのため、病棟は全く変わらないですが、それ以外のことは見るものすべてが新しい発見の連続でした。

転院や施設入所の支援は、患者さんや家族は希望されない中で、緩和ケア病棟に長くいられないために、その後の療養先を一緒に探すことになります。その中で、少しでも、患者さんや家族が安心して療養できる先を考えられるように努めていきたいと思います。

地域医療連携センター 脇澤 愛

10年ほど外科病棟に勤務し、今年の4月から地域医療連携センターに異動となりました。患者さんに直接看護を提供する立場から、主に自宅退院を目指す患者さんと地域を繋ぐという立場となり、今までと全く異なる仕事の内容に戸惑う毎日です。

しかし、異動してまず初めに感じたのは、地域には「家で過ごしたい」と願う方を支える人が、たくさんいるということでした。「家に帰りたい」という患者さんからの声に耳を傾け、患者さんとそのご家族が望む場所で、少しでも長く過ごせるよう、地域の方と連携し、自宅に帰るお手伝いをしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



笹倉山の頂から大学病院を眺めて

臨床宗教師 金田 諦晃

緩和ケア病棟の窓から眺める七ツ森の、一番高い山（笹倉山）にいつか登ってみようと思っていたが、ついにその機会が訪れた。山頂に辿りつき、今度は反対に大学病院を眺めてみたが、双眼鏡でやっと発見できる程度であった。「思っていたよりもずっと距離があるんだなあ」と小さな発見であった。

山頂には、“無病息災”など健康を祈願する薬師如来像を祀る薬師堂がたっていた。手を合せつつ、登頂した疲労感もある中で「よくこんな高い所にお堂を建てたものだ」と、お堂を建てた当時の人々の想いに興味を抱いた。

帰宅後、お堂が建てられた時代の世の中の状況について調べてみた。すると、洪水や冷害などの自然災害をはじめ、天然痘やさまざまな疫病の流行により、多くの人の命が奪われたであろう過酷な歴史があったことを知った。きっとあの薬師堂には、平穏な日常への切なる願いや祈りが込められていたのだと、当時の人々の想いに身を寄せた。そして、今の時代を生きる自分自身をみつめた。

昨今、まさに自然災害やウイルスの蔓延により、平穏な日常が奪われようとしている。そして、私自身が“当たり前”と思い込んでいた日常が、実は“当たり前”ではなく、いくつもの奇跡が重なり合った瞬間の連続なのだということがつかされている。

ある偉人が語ったように奇跡など全く起こらないかのように生きるか、すべてが奇跡であるかのように生きるのか。時折、病棟から七ツ森を眺めながら、初心に帰るように、日々の“当たり前”の有難さを感じている。



今年の振り返り

看護師長 三浦 洋子

2020 年は本当に忘れられない 1 年になりました。東北大学病院ではシステムの更新・水漏れから始まり、新型コロナによる面会制限は、御家族との時間を大切にしたい緩和ケア病棟の基本にも添えないことに心苦しい毎日でした。ボランティアの方も制限がかかってしまい本当に淋しい思いでした。そんな中でも作品を届けて頂いたりして気持ちが穏やかになったりもしました。今までの作品をコーディネーターの方に飾って頂き病棟内には季節を感じることができ患者様ご家族、そして職員も癒やされていました。たくさんの目に見えない不安の中一日一日が過ぎていき今年も終わろうとしています。

緩和ケアからの景色はいつも変わらず、南側に太平洋を望み、北側の部屋からは七つ森の四季を感じられます。大切な方とお別れに辛い思いをされた方もたくさんいらっしゃると思います。少しでも以前の生活に近づけることを願って、皆様との繋がりを大事に過ごしていきたいと思います。

診療統計

対象期間 2017 年 (2017 年 1 月から 12 月)
2018 年 (2018 年 1 月から 12 月)
2019 年 (2019 年 1 月から 12 月)

	入院数	在院日数	死亡退院数	稼働率	待機期間数
2017 年	262 人	23.7 日	196 人	75.6%	
2018 年	280 人	21.7 日	211 人	74.9%	8.2 日
2019 年	280 人	19.4 日	227 人	66.2%	7 日

病院のお散歩



手品の弟子



病棟コンサート





ペンネーム 白州 征さん作

編集後記



今年は COVID-19 感染拡大の中、当緩和ケア病棟も面会制限を余儀なくされました。

原稿や作品をご提供いただきました皆様には心より御礼を申し上げます。

今後とも皆さまとの出会いを大切にスタッフ一同力を合わせていきますので、よろしくお願いいたします。

令和2年度 編集担当一同



七っ森

Nanatsu-mori

第23号

令和3年1月発行

東北大学病院 緩和ケア病棟

〒980-8574

仙台市青葉区星陵町 1-1

TEL : 022-717-7986

FAX : 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp>

印刷：株式会社 仙台共同印刷